

2022年1月9日（日）

題 『良い思いを大切に』

テキスト：マルコによる福音書7章：14～23節

2022年の始まりにマザーテレサの言葉を思い出します。

「思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。」

今日の聖書箇所を読み学ぶ中で心に浮かんだことばです。
今年、今年こそは、悪い思いではなく、良い思いを大切に少し生活したものです。

今日の聖書の箇所は、イエスさまが群衆を呼び寄せておられる場面から始まっています。

この前の箇所では、ユダヤ教の指導者階級であったファリサイ派の指導者たちがイエスの活動を調べにエルサレムの町からガリラヤへとやって来ていた場面です。彼らは今から約2000年前のユダヤ教の掟、律法、汚れた手で食事をしないと、食べる物に関する決まりを宗教的な意味で重要に考え、「これは食べて良い、これはダメと言っては」民衆の生活を厳しく取り締まっていたのです。旧約聖書にも食物規定はレビ記などにありますが、それを宗教的組織維持のためにも徹底していたのです。イエスさまは、人間の作った権力者たちの組織を維持するための規則や儀式より、愛なる神さまの本質を大切に、行動することを弟子たちや民衆に教えていきました。

14:それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。」

15:外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

「外から人の体に入るもの」とはこの場合、日々の食物（食べ物）のことだと思われま。

イエスさまは、体に悪いものは別として、感謝して食べれば、どんなものも食べて良いと考えておられたのだと思います。このことが当時のユダヤ教の指導者たちには怒りを買ったのです。

ところで礼拝で使用している新共同訳聖書には、16節は書いてありませ

ん。15節の後に、十字架のような印があります。

これは、新共同訳聖書のベースとなった聖書の古い写本には16節のことばはないのですが、後代の写本には書いてあるものもあります。そこには「16>聞く耳のある者は聞きなさい。」と書いてあるのです。イエスさまが大切なことを言われる時に使われた言葉です。

さて、

17:イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。

18:イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。

19:それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。」

「そして外に出される。」これは原典のギリシア語ではトイレを表すようです。飾り気のない生活用語が使われています。人を生かす自然のものやどんな食べ物ものも、「体にも心にも、何の問題もない！」ということです。これはイエスさまの考えだとわたしは思います。つまり自然からの物より、人間の作った儀式的な不浄よりも、反対にわたしたち人間の自然や人間に対する道徳的な倫理的な、人間のことばや行いの方が遥かに問題だということではないかと思えます。今日のSDGsの考え方にも通じるものがあるように思えます。人間や自然を破壊するのは人間ではないのか、ということです。

そして、

20:更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。

21:中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。

問題なのは、人の心から出て来るものだとイエスさまは、弟子たちに言われています。今日、わたしたちにも言われているのだと受け止めます。「人から出て来るものこそ、人を汚す。」それは、人の心だけではなく、体をも汚す力があるのです。キリストの群れである教会の交わりの中でも心しておかなければいけないことだと思えます。

キリストにある群れ、教会の中で語られることばや行いで、心も身体も弱って行く人たちがいるという現実もあるのです。それは人間の心から悪い思いが出てくるからです。どのような悪いと言われる心の動きがあるのでしょうか？。

21:中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。

みだらな行い、盗み、殺意、

22:姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、

23:これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

21節と22節に記された悪徳リストはイエスさまの言葉としては他の聖書箇所には主イエスのことばとしては見い出せず、イエスの主張の精神を初代教会の状況に応じて表現されたものかもしれないという学者たちもいます。

おそらく、程度の差はあれ、この悪徳リストをわたしには全く自分に関係ないと言いきれる人は神さまの前にはいないのではないかと思います。

誰しも神を恐れ敬い、神さまからの愛なる聖霊の力を受けて変えられなければならないし、成長させてもらえるのだと思います。

愛の御霊を受けてこそ信仰者として作り変えられて行くのです。これは希望です。それを求め続けたいと思います。

ところで、以前にもお話したことはありますが、「アウグスティヌスの回心」の出来事は有名です。故相沢建司牧師の解説をまとめてお伝えさせていただきます。

アウグスティヌスは初代のキリスト教会の教父で、キリスト教の歴史に大きな影響を与えたと言われている人物です。古代ローマの最も偉大な神学者アウグスティヌス（354～430）は、北アフリカのヌミディア（今のチュニジア）の町タガステで生まれました。父は町の中流の地主、母は敬虔なキリスト教徒で「賢母」として知られるモニカとう名前の人です。

アウグスティヌスの回心のことは、彼の著作「告白」に書いてあるのですが、彼が学んでいた大学のあるカルタゴは、当時ローマ帝国の中でも大都市で、経済的に繁栄し文化は栄え学問研究も盛んでありました。他方、性風俗は乱れ、男子は17・8才になると愛人と同棲する習慣であったとのこと。

16才のころをふり返って、アウグスティヌスはこう述べている「齢(よわい)一六の時、私は汚れた人間の風習によって放任されているが、あなたの法(神)によっては許されていない凶暴な情欲が全権をふるい、私は完全に屈伏してしまいました。家の者は墮落して行く私を正当な婚姻で抑えようとは配慮しませんでした」。アウグスティヌスは16才の大学生の時、カルタゴで出会ったある女性と同棲し、2年後には子まで生まれ、15年間連れ添ったそうです。

大学では2年間哲学、修辞学、弁論術を学び故郷にもどり哲学の教師をし、後にはカルタゴで29才まで哲学を教えます。

お母さんのモニカからは小さいころからキリスト教について教えられていました。彼は情欲にとらわれた自分にみじめで絶望していたようです。

彼に回心が起こったのは、彼がミラノの友人のもとに引きこもって生活をしていた時です。彼は肉欲の思いを断ち切れない自分にひどく悲しみ、涙に泣いていました。

「すると、どうでしょう。隣の家から繰り返し歌うような調子で少年か少女

か分かりませんが、『とれ、よめ。とれ、よめ』という声が聞こえてきたのです。アウグステイヌスはどっとあふれる涙をおさえて立ち上がりました。これは聖書をひらいて、最初に目にとまった章句を読み、との神の命令にちがいないと思ったのです。そこで彼は急いで友人のすわっていた場所にもどりました。そこには使徒の書が置いてあったのです。ロマ書だったようです。それをとって最初に目にふれた章句を黙って読みました。

『宴楽と泥酔、淫乱と好色、争いと嫉み（そねみ）を捨てよ。主イエス・キリストを着よ。肉欲を満たすことに心を向けるな』（使徒パウロ、ロマ13：13～14の要約と思えます。）。

「この節を読み終わった瞬間、いわば安らぎの光とでもいったものが、心の中に注ぎこまれてきて、すべての疑いの闇は消え失せてしまったのです」

子どもたちの遊びの歌声「とれ、よめ（取れ、読め）」は彼にはある種の「靈感」として作用しました。彼はそれを「神の命令」と受け止めたようです。有名なこの劇的な回心は、アウグステイヌス32才の時のことでした。彼は著書「告白」の冒頭で神についてこう述べています。「あなたは私たちをあなたにむけてお造りなりました。それゆえ私たちの心はあなたに憩うまでは安きを得ることができないのです」（1・1）。

アウグステイヌスは十数年間にわたる長い長い苦闘のすえに、やっと「彼の心が神に憩う安らぎを体験した」のです。後に彼は教父アンブロシウスから洗礼を受けます。

アウグステイヌスは回心、つまり心をすべて神に向け委ね、他の何を持ってしても受けることのできなかつた全き平安を受けることができたのです。自分の心を一番深いところでしばりつけていた鎖のような罪の力から解放され自由と平安を得たのです。これは私たちにも起こりえる神さまからの恵みの賜物です。

いかがでしょうか。わたしを含めてそれぞれに内容は異なっても、自分の心を縛りつけている罪の力、エゴイズムの力があるではないでしょうか。多くのはそれを気付かないのです。気づいて悩み苦しんでいる人もいます。その人は求めれば、救いと解放のすぐそばにいます。十字架にイエスさまと共にいた罪人の一人のようにです。

神の子イエスさまは、十字架で血を流し、罪に縛られた人間の心に、解放と自由を与えてくださったのです。それを思うと本当にありがたく思います。

そして生活の中で悪い思いではなく、良い思いを大切に生きて行きたいと願うように、切に求めるようになるのではないのでしょうか。イエスさま、神さまの愛に満たされて生きる時、ガラテヤの信徒への手紙5章22節からの言

葉がわたしたちの上に、わたしたちの教会に実現して行くのです。

22:これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、

23:柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。

御霊の実が心の内に実り、良い思いが悪い思いを包み込んで行きます。愛なる主イエスは今も手を広げて「あるがままで我に来よ。我に来よ。」とわたしたち一人ひとりを招いてくださっているのです。

14:それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。

15:外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

16>:聞く耳のある者は聞きなさい。

(底本に節が欠けている個所の異本による訳文)

17:イエスが群衆と別れて家に入られると、弟子たちはこのたとえについて尋ねた。

18:イエスは言われた。「あなたがたも、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。

19:それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。」

20:更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。

21:中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、

22:姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、

23:これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」